# 令和５年度　伊豆の国特別支援学校　第３回　学校運営協議会　記録

１　日　時　　令和６年２月 14 日（水）午前 9 時 30 分から午前 11 時まで
２　場　所　　静岡県立伊豆の国特別支援学校　会議室
３　参加者
　〇学校運営協議会委員
　　若林　高至　様　なのはな相談室　室長
　　山田　芳治　様　社会福祉法人春風会　障がい統括施設長
　　東方　慶　　様　三島市手をつなぐ育成会　理事
　　山元　薫　　様　静岡大学　教育学部　特別支援教育　准教授
　　川島　庸　　様　伊豆の国特別支援学校　ＰＴＡ会長
　〇教職員
　　校　　長　松本　仁美　　副 校 長　廣瀬かよ子　　教　　頭　井上みづほ
　　事 務 長　鈴木　健夫　　小学部主事　渡邉　康子　　中学部主事 水野　靖弘
　　高等部主事　岩谷　俊宏　　教務課長　廣　和子
４　内　容
　(1)開会
　(2)校長挨拶
　(3)校内参観
　(4)令和５年度の学校経営の報告・評価について
　(5)令和６年度学校経営方針について
　(6)閉会

５　議事録

令和５年度学校経営評価について

〇本年度の取り組み【安全・安心】安全教育について

教頭　・地域の人が学校に避難できるように一般避難所として協定締結に向けて話し合っている。来年度は地域と避難訓練をともに行い、地域の人に校舎を見てもらう計画も上がっている。

小学部部主事　・小学部段階の安全教育として、日常から教室移動の際はクラスでまとまって取り組んでいる。「一緒だと安心。」と児童に言葉を掛けながら、有事の際も同じ行動ができるように児童の意識を育んでいる。

委員　・ＢＣＰ（事業継続計画）の中で常時と非常時の対応を示す必要性が言われている。
　・大規模災害が起こった中で参集できる人は多くない。その時に大事なのは自助、公助、隣近所というが、地域の人にあらかじめわかってもらうことが大事。総合防災訓練や地域防災訓練を行っても地域住民がなかなか避難所運営に対する意識をもつまでは難しい。地域と共に取り組むことは良い。

委員　・学校が避難所になった時、食料等はどのようになるのか。

委員　・本来は、避難所に来る人たちは自分で食料や毛布等を持参するのが前提。

委員　・学生の福祉避難所調査では、静岡県では避難所に備蓄されていないところがあることが判明している。被災経験のある他県では備蓄されている。静岡県でも備蓄されると良い。

○本年度の取り組み【連携】地域と共について

副校長　・コロナ禍の開校から三年間、地域での活動を広げてきた。来年度は「知ってもらう、一緒に行う」から、「地域と共も歩む学校」というスタンスで考えていく。

中学部部主事　・時代劇場での花植えからつながりができ、続いている。地域の方々と顔を合わせられる場面があることで、生徒も目的を理解して活動に取り組んできている。

教頭　・今年度、初めてＰＴＡバザーを保護者向けに行った。来年度は地域の方にも来てもらいたい、伊豆医療センターが今年度４年ぶりに実施した福祉まつりと本校のＰＴＡバザーをコラボしてはどうかという声がある。

・今年度韮山高校の玄関清掃を、高等部地域ワーク班が実施して好評だった。今年度他県から専門家を招いて行った書道体験などを、来年度は地域の高校生の力を借りて行う計画を立てている。

委員　・お互いの顔と名前を知ることが大事だと思う。児童生徒の名前が分かれば声を掛けやすい。地域の人にこの学校の子たちの顔と名前を知ってもらう機会を持って、つながりが深まるとよい。

○本年度の取り組み【専門性】キャリア教育について

副校長　・キャリア教育のあり方について、「卒業後の進路先の多様化」「人生 100 年時代の社会や生き方の多様化」の中、校内でも進路指導や情報提供の在り方の課題が話題となった。

高等部部主事　・今年度高等部の進路は就職、職業訓練校、福祉就労、福祉型大学にと多岐にわたる。新しい事業所もできていて、高等部の職員は情報を得ていかないと進路指導が難しい。そのような必然性もあり高等部職員間では情報共有できる。小学部高学年の保護者は進路への興味があるが、低学年の保護者の中には「まだ先のこと」と言う方もいて、意識できにくい方も多いと感じる。

校長　・小学部低学年の頃から意識するのは難しいというが、合わせて教員の意識も変えなくてはいけない。せっかく小学部・中学部・高等部とある同じ学校にいるのだから、教員が他学部を見に行く、保護者も来校したときに他学部を見に行くことが来年度の課題である。

・進路の幅が広がっている。ＩＣＴも進んでいて、卒業したらスマホで給料明細のチェックや確定申告を行う会社も多い。高等部を卒業した生徒がすぐに対応できるためのＩＣＴ教育の充実も課題である。

委員　・以前、特別支援学校は小学部・中学部・高等部と一緒に行事を行っていた。そこで小学部の保護者が高等部生徒の姿を見て自分の子供の将来像を考える機会になっていた。先日の小学部なぎのこ発表会では、保護者が自分のこの学年を見た後、他学年の発表を見ることなく帰ってしまう方もいた。コロナもあって意識も変わったと感じた。

委員　・小学部・中学部・高等部が一緒に行事を行い、子どもが小さいうちに高等部の生徒の姿を見ることで、親も将来への期待を感じる。以前は小学部の保護者が参観会の帰りに中学部・高等部を見に行くことができた。

委員　・進路先の多様化については、昨今事業所を作っても人手不足で事業所を閉めてしまうところも多い。福祉関係の職員の給料の安さも関連している。４月から利用者 10 名に対し職員３名でも認可がおりるようになるが、な

かなか昇給しないこともあり職員が辞めてしまうところもある。昨今増えてきている福祉型大学は、大手が来て設立するが、どのように地元に馴染んでいくかが今後の課題と感じる。

校長　・福祉、教育ともに人材がいない。この状況は静岡県の東部地区だけか、全国的なのか。

委員　・大きい法人は人事異動できるが、小規模授産所は大変である。福祉業界だけでなく、役所も離職率高い。メンタルの面での課題や「自分に合っていない、上司と何でも話せる関係が作れない」等の理由も多い。

・保護者が施設見学に来てもらうのもよいが、体育館に事業所が集まって、自主生産製品を展示したりプレゼンをしたりする、進路先紹介のフォーラム形式での場を持つのもよいのではないか。

・福祉でも農業と同じように人手不足解消のために外国人実習生を受け入れるが、資格を取って祖国に帰ってしまうのは痛手である。

委員　・福祉事業所がどこにあってどのような人がいてどのような活動をしているのか知りたいと親から質問があり、育成会としてもパンフレットを作成している。ただ、新規の事業所からは重度の方も利用して欲しいと言われて実際見に行くと、対応できるのかと不安になる所もある。進路先は保護者が繰り返し見に行くことが大事と感じる。

・子どもにとっても親にとっても職員が変わることはすごいストレスになる。昔は担任が変わるごとに面談で子どものことを説明していたが、教育支援計画やキャリアパスポートの充実で 12 年間がつながるのはとても良い。

令和６年度学校経営計画について

校長　令和６年度学校経営計画案をもとに重点について説明

・教職員の人権感覚だけでなく、子供たち同士の関わりも重視する。

・安全教育の充実については、ヒヤリハットを共有して質の高い教職員集団を目指す。

・キャリア教育について教員間で「キャリア教育」の捉え方を確認し、将来を見据えて今必要なことを考えるようにする。

・センター的機能については、連携の強化を追加した。中学校から本校に入学するときに困って迷っている生徒もいる。小中学校の特別支援教育を必要とする子供や学校への支援、高等学校入学後の支援等、連携して充実していく。

・業務削減についても、業務が多い中、引き続き取り組む。